

二〇二一年八月一六日(参加者一九名)

寄せ植の鉢花長けて秋更くる
葉蔭より心もとなき秋の蝶
ロープウェイいまかなかなの輪唱裡
落蝉のどこも傷なく転がれり
吾子嫁ぐ日や一面のいわし雲
暁闇の一村あくる夏の霧
残る火を孫に渡して庭花火
閉店を告ぐる貼り紙秋の風
頬なずる風まぎれなく涼新た
流灯の沖へ沖へと潮に乗る
大笹を鳥居に結はへ星祭る
みんなのスローテンポに歩の合はず
チエンソーの音もかき消す蝉の声
麓 駅 前 山 蝉 の 大 合 唱
かなかなや社に閉ざす能舞台
くぐる橋低しと奇声舟遊び
大男隣に座り秋暑し
はらからも僧も老いたり盂蘭盆会
一末寺村総出なる施餓鬼かな
宿題の子らが占めたる夏座敷
流星を語る子の瞳に星宿る
星流れ一村包む深き闇
湖に立つ赤き鳥居に秋日落つ
稲穂ゆる近江の湖のきらめきに
騒ぐ子を見てゐるだけのサングラス
踊り好き紅い鼻緒の切るるまで
隠池人影もなく蝉時雨

明日香
" "
" "
" "
よし子
" "
" "
" "
" "
" "
せいじ
" "
" "
うつぎ
" "
" "
" "
有 香
" "
" "
" "
百 合
" "
" "
" "
つくし

舟のごと横たふ大樹堰涼し
落し物タオル掛けある葛の棚
枯山水庭の砂紋に秋立ちぬ
夜焦がす万灯供養盂蘭盆会
墓どころ寧かれと舞ふあきつかな
朝明に訪ふ写経寺鐘涼し
稔り田の色に染まりし峡の里
深き谿なれども今朝は霧の湖
鵜飼舟乗り込む河原石ふみて
シースルーエレベーターや館涼し
暁のかなかなに覚む里泊り
パソコンを座右に灯下親しめり
外厠目線の窓にヤモリかな
満月の赤くうるみし終戦日
露天湯を一人占めして星涼し
波打てる蓮の広葉や池広し
水澄むや小さき堰に稚魚走る
新駅はガラスのお城秋うらら
月白に切り絵めきたる天守かな
新涼や駅ビルの大異空間
日のぬくみ残る秋茄子もぎにけり
風一陣わたる夕日の芒原
爽やかに三つ子遊ばす母若し

" "
" "
" "
ぼんこ
" "
" "
小 袖
" "
" "
" "
きづな
" "
" "
" "
こすもす
" "
" "
かれん
" "
" "
わかば
" "
" "
菜 々
" "
" "
はく子
" "
" "
宏 虎
ひかり

定例会みの選
二〇二一年八月一六日(参加者一九名)